

主体的・協働的に思考力・判断力・表現力を 身に着けさせる理科「はがき新聞」

～一人一人互いの違いを認め、一人一人輝けるために～

堺市立美原中学校 教諭 奥田 雅史

1. はじめに

現行の学習指導要領では、「確かな学力」を育むために「思考力・判断力・表現力」及び「主体的に学習に取り組む態度」を育むことを目指している。次期学習指導要領では、それらに加え、「知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるものの全て」を総合的に育むために、それらを主体的・協働的に経験することが求められている。^{*1}

本校においても、2008年度より「学びの共同体」に取り組み、子供たちが「何を知っているか」よりも、「知っていることを使ってどのように他者と関わり、理解を深めるか」ということを重視し、授業をはじめとしたさまざまな教育活動を行ってきた。

筆者も生徒が一人一人互いの違いを認め、一人一人輝けることを常に意識して実践を行うことで、生徒に「主体的・協働的に思考力・判断力・表現力」を身に着けさせることを目指して授業を計画し、実践してきた。

本報告では、上記のような力を身に着けさせるにあたって次期学習指導要領の柱となるであろう「アクティブ・ラーニング」を意識した教育活動の一例として本校2年生で行った理科の「はがき新聞」の授業実践を紹介する。

2. はがき新聞とは

「はがき新聞」とは公益財団法人理想教育財団が学校情報伝達システムに関する調査研究活動の一環として普及を行っているもので、はがきサイズの新聞である。

はがき新聞の大きな特徴は、①手紙（郵便）であること、②はがきであること、③新聞であること、の3点である。これらには、上記の力を育むにあたり、重要な利点がある。

- ①作文やレポートとは異なり、読んでくれる相手が明確であるという点から交流することと、誰かに伝えることを意識させられる。
- ②縦 14.8 cm×横 10 cmの小さな紙面であるので、文章が苦手な生徒も意欲的に取り組む事ができ、文字数も少ないため、要約して伝える文章力を育むこ

とができる。

- ③タイトル・見出し・イラストなど読み手に伝えるための表現方法が多くあるため、生徒の特徴に合わせて作成することができる。さらに、印刷することで、はがきだけでなく、新聞として多くの相手に発信することも目的として作成できる。

「はがき新聞」にはさまざまな形式があるが、今回の



「理科に関する新聞記事」
5mm方眼「はがき新聞」使用

「業績をあげた偉人について」
6mm方眼「はがき新聞」使用

実践ではまとめる内容容量が大きい4mm方眼の「はがき新聞」を用いて実践を行った。

3. 実践の目的

生徒が一人一人互いの違いを認め、一人一人輝けることを念頭に置き、「主体的に、協働的に思考力・判断力・表現力」を磨けるよう生徒の活動ごとに①～⑤の目標を掲げ実践を行った。

- ①個別に「はがき新聞」を作成することで、子ども一人一人の個性に応じた資質・能力を伸ばす。
- ②新聞を作成することで、今までの学習活動を自ら振り返り意味付けさせたり、獲得した知識・技能や育成された資質・能力を自覚させたりする。

- ③班員と協働して作成することで、他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点などの理解を深めさせる。
- ④クラスメートの新聞を見たり、発表を聞いたりすることで身に付けた知識や技能をさらに定着させるとともに、物事を多面的に深く理解したり、多様な表現を通じて思考を広げ深めさせる。
- ⑤クラスメートに新聞を見てもらったり、口答で発表したりすることで、クラスメートからの理解が深まることによって新聞を作成・発表した生徒の自信につながり、さらなる主体的な学びへとつなげる。

4. 実践の概要と成果

化学分野において内容をすべて履修したのち、定期考査に向けて、「テスト勉強になる『はがき新聞』」をテーマに3時限で実践を行った。作成にするにあたり、発表会を行うこと、生徒の相互評価を行うことを事前に伝え、「新聞」として他者に表現し、発信することを念頭におくことを指導した。

(1) 「はがき新聞」の作成過程

昨年度に2回、今年度も春休みの宿題として「はがき新聞」を作成していることから、過去のクラスメートの作品を参考に作成させた。あくまで、個別の作業であるが、班の隊形で作業させることで、自然と頭を寄せ合い班員の新聞を見たり、「○○はどこが苦手?そこを私はテーマにしてみる」や「この見出しとこの見出しどっちが伝わりやすい」など対話の中から自分の頭を整理したり協働して新聞を作成することができた。残った部分は家庭学習でも行ったので、2時限で完成させることができた。



【班で協働して新聞を作成】



【班で協働して新聞を作成】

普段の理科の授業においても、学びの共同体に取り組み、「主体的に、協働的に思考力・判断力・表現力」を育める授業を行っているが、やはり理科に苦手意識を持つ生徒が、そうでない生徒に比べ、活動的になる場面が少ないのが現状である。

しかし、「はがき新聞」においては、理科が得意な生徒はもちろん、そうでなくても、文章をまとめるのが得意な生徒、イラストが得意な生徒、レイアウトが得意な生徒、見出しなど発想力に自信がある生徒など多くの生徒が主体的に取り組むことができたのが一番の成果であると言える。さらに、それぞれの作品を協働して作成することで一人一人互いの違いを認め合うことができ、それぞれの自己肯定感や自尊感情が高まったと感じた。

(2) 班における新聞発表会

3~4人の班で、発表会を行い、相互評価により新聞の評価を行った。

事前に発表時間を告げてあったため、読み原稿を考えてくる生徒や話す内容を考えてきた生徒など発表に向けてさまざまな工夫をした結果、充実した発表会になった。また、相互評価も素直に、相手のよかったところだけでなく、工夫したらさらによくなるどころなど、書く事ができた。



【ペンで新聞をさして発表】

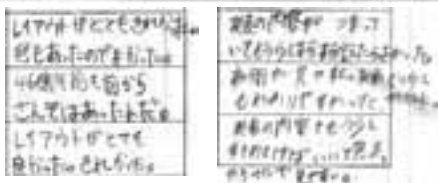


【指さし、みんなに見せ発表】

相互評価シートより、班員との交流や議論などから互いの多様な考え方の共通点や相違点に気づき、それらを通して、理解を深めることができたことがわかる。

ここでは、話すことが得意な生徒や、みんなの前でも物おじせずに言える生徒が輝けるなど多くの生徒が活躍できたことが何よりの成果であると言える。

原稿の内容	新聞の見やすさ	発表の内容	合計	感想
3・2・1	③・2・1	3・2・1	7	「...」
③・2・1	3・2・1	③・2・1	8	「...」
3・2・1	3・2・1	3・2・1	4	「...」



【生徒の相互評価シートより】

(3) クラスにおける新聞発表会

班の相互評価により代表者を決め、クラスメート全員に向けて、新聞発表を行った。

班内の発表でよかったと言ってもらったところを強調して説明したり、分かりにくかったところを補強して説明したりするなど、個人の発表というよりも、あくまで班の代表者としての発表ができたことがよかったと感じた。また、「分かりやすい工夫」としか指示はしていないものの、原稿を覚えたり、笑顔で表情を作ったり、身振り手振りで表現したり、クラスメートに問いかけたり、質問をしたりすることができた。さらに、中には大切な部分は新聞を指さしたり、黒板を使ったり、補助資料を用意したりするなど主体的に取り組めたのが今回の一番の成果であったと言える。



【指さし、問いかけ発表】



【黒板を使って説明を補強】

その結果として、聴くときの指導は特に何もしていなかったが、私自身も思わず「聴きたい」「見たい」と思っ

た発表であったため、生徒も食い入るように発表を見て、聴いていた。



【真剣に聴き入る様子】



【身を乗り出して見る様子】

(4) 授業後の学年での交流

化学反応式のつくり方を理解し、なぜそうなるのか、とすれ、発表していた。他にも、単体や化合物、何月、原子と分子の色が...

「...」

あなたが選ぶ、ベストオブ新聞発表者は()さん!

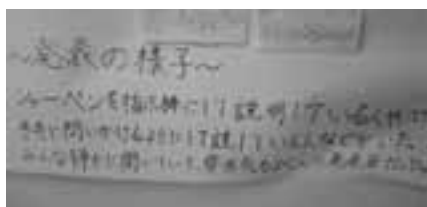
【生徒の相互評価シートより】

クラス発表会で紹介できたのは、班の代表者だけであつたため、全員の新聞を見てもらうため、また他クラスや教員にも見てもらうために掲示物を作成した。

その際に、理科係にお願いすると、快く各クラス引き受けてくれ、「せっかくやるんやったら妥協したくない」と放課後に1時間以上残ってくれる生徒も多かった。そんな理科係やボランティアの想いが伝わったのか多くの生徒が見ていた。今後は、それぞれのクラス発表会で、生徒の相互評価の高かった生徒の発表を学年集会で行い、発表の全体のレベルが上がるよう支援したい。また、今回の新聞の内容やレイアウトのよかったものは次回の新聞作成のサンプルとして使用し、新聞のまとめかたや表現の仕方の全体のレベルが上がるように支援したい。



【廊下の掲示物を見る様子】



【理科系の感想】

5. 最後に

今回の実践では、新聞を作っていく中で今まで表面的に理解していたものが、「本当にそうなのか。」と考えることでこれまでの学習活動を自ら振り返り意味付けさせたり、獲得した知識・技能や育成された資質・能力を自覚させたりすることができた。それに加えて、普段から班員と協働することが定着しているため、自然と班で支え合い、作成する姿が多く見られ、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点などから理解を深めることもできた。

さらに、新聞を作成して、掲示するだけでなく、発表会を行うことで、身に付けた知識や技能をさらに定着させるとともに、物事を多面的に深く理解したり、多様な表現を通じて思考を広げ深めさせたりすることができた。加えて、他者の理解を深められたことで、生徒の自己肯定感や自尊感情を高めることができ、さらなる学びへの意欲につなげることができた。

そして、実践全体を通して、「どのようにすれば分かりやすいか。」や「どうしたらみんなに伝わるか。」など生徒が主体的にさまざまな取り組んだことが何よりの成果であるといえ、これより「思考力・判断力・表現力」に加えて、「問題解決力」や「継続的な学習力」を身につけられるようになったと考えられる。

最後に、私自身がこの実践を本報告だけでなく、主体的に分かりやすいよう工夫し周りに発信したことで、それらを見ていた国語科・英語科・音楽科の教員も「ぜひ、実践をしてみたい」と声をかけてくれ、今後も学年や学校のチームとして、生徒の社会で求められる力を養うことができる糸口ができたことも大きな成果であると言える。

【今回作成した生徒の作品①】



【今回作成した生徒の作品②】

【参考文献】

- *1 教育課程企画特別部会 論点整理(平成27年8月)